

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：34306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03331

研究課題名(和文)正義論としての集合的意思決定論

研究課題名(英文)Collective Decision Making in a Theory of Justice

研究代表者

野崎 亜紀子(NOZAKI, Akiko)

京都薬科大学・薬学部・教授

研究者番号：50382370

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、集合的意思決定のあり方を問う規範的・正義論的理論の構築を目的とした。国際学会での個別報告を含め個々の研究を進めた上で、国際学会ではワークショップを開催した(Collective Decision Making in a Theory of Justice at IVR World Congress 2019)。これらの議論を踏まえ、多様な個人の自由と一定の集合性/集団性の維持尊重とが相互に基盤となり、相補的機能を果たすこと示した。具体的には、社会福祉国家を基礎付ける自由の理論、リベラル・ナショナリズムの理論、また専門知とリベラリズムの理論への接続という成果に結実させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、個人の自由を基盤とする社会秩序の維持に向けたリベラルプロジェクトの一環に位置づけられる。個人の尊重を正義の基底に置くリベラルプロジェクトに於いて、個人を支える集団性・集合性という理解は論争的であり、その相補性の積極的理論展開は不十分であった。国家および専門家集団といった集団性・集合性を、個人の尊重と接続しこれを尊重する(すなわち正義論として)積極的肯定的に理論提示を行ったことは、リベラルプロジェクトという学術的取り組みへの貢献ととともに、社会の現実としての個人を支える集団性・集合性についての納得と説得を支える語の提供という点から社会的意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This study aims to construct a normative theory of justice that calls into question how collective decision making ought to be conducted. After advancing individual studies including unique reports at international conferences, a workshop on the same topic as this study was held at an international conference (SW 78 Collective Decision Making in a Theory of Justice at IVR World Congress 2019). Building on those discussions, I show that the freedom of diverse individuals and the maintenance of a level of collectivity/group cohesion can each serve as a foundation for the other and that they perform complementary functions. More specifically, it has been established that this topic connects the theory of freedom underlying the social welfare state, liberal nationalism, expertise and liberalism.

研究分野：法哲学

キーワード：集合的意思決定 正義 自由 リベラル・ナショナリズム プロフェッショナリズム 専門知 社会福祉国家

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究が取り組む「集合的意思決定」論は、個人の自律性の尊重を基本的な社会原理とする自由な社会 (liberal society) において、社会を構成する諸個人を拘束する集合的ないし公的な意思決定が、いかなる条件で諸個人を拘束するだけの正統性 / 正当性を有するのか、またその条件を具備する具体的現実的な制度はいかなるものであるのかに関する規範的・正義論的理論である。

経済学や政治学の領域において、社会的決定理論 (社会的選択理論) あるいは合理的選択理論と呼ばれて取り込まれてきた理論は、この問題に密接に関わる。すなわち、これらの理論においては、個人の集合体である社会において、自律的な個人が有する多様な選好 preference を集合的に集計する多様な方法、それらの集合的意思決定の諸方法がもたらす効果とその特徴、およびそれらの諸方法を組み合わせた制度のあり方などが検討されてきたのである。ただ、これらの経済学・政治学領域の議論は、ゲーム理論を中心とするミクロ経済学的分析や現実政治の実証分析を主たる内容とするものであり、必ずしも規範的・価値的問題を主たる検討課題とするものではない。

また、規範的・価値的問題を扱う場合でも、素朴な「民主主義」や個人の選好実現を最大化する功利主義が、規範的な吟味を経ずに前提されていることが多く、どのような集合的意思決定の手段・実体的条件が正統性 / 正当性を有するのかという法哲学的問題にこたえるには、不十分な点が多いと考えられる (ケン・ビンモア『正義のゲーム理論的基礎』、S.C.Kolm, Macro Justice 論等は重要な先行研究と位置づける)。

他方で、政治学におけるいわゆる熟議民主主義論その他の民主主義論は、規範的・価値的な観点から集合的意思決定のあり方を扱うものだと考えられる。熟議民主主義論は、諸個人の選好や意見が時間をかけた議論を経る過程で変容していくことを視野に入れ、単に多数決による決定ではなく、諸個人が実質的に行う話し合いの質を高めることで、その結果生まれる意思決定がよりよいものになることを狙うものだといえ、本研究にとっても学ぶべき点が多い (田村哲樹『熟議の理由』等)。しかし、熟議民主主義論においては、熟議の結果生まれる民主主義的な集合的意思決定が個人の自律性の尊重といかなる関係にあるのか (個人の自律性の尊重の観点から集合的意思決定には限界がないのか)、よりよい決定だといえる規範的基準はどのようなものであるのかなどがなお不明であり、正義論的な解明を必要とするといえる (C. サンステーン『熟議が壊れるとき』は重要な先行研究と位置づける)。

2. 研究の目的

本研究は、個人の尊重の原理を基盤とする近代法理論の下に「集合的意思決定」を位置づける理論的可能性を検討し、これを正義論の一環として構想する事を目的とする。集合的意思決定問題とは、個人の生活に密接にかかわるがしかし、当該個人を含む社会で対処しなければならない具体的課題 (生命倫理、環境倫理、エネルギー政策に関する問題等) を典型とする、自律性の尊重という思考のみでは解決しきれない問題である。「わたし」の自己決定と「わたしたち」の自己統治の関係については、法理論的整理と解明が不十分である。法哲学周辺領域の先行研究を踏まえて、正義論の一環としての理論問題と位置づけ、現代の難題である具体的な集合的意思決定問題の解決に向けた議論の前提となる理論の提供を行う。

3. 研究の方法

(1) 研究体制

研究代表者である野崎亜紀子 (法哲学、医事法) の他、3名の分担研究者として嶋津格 (法哲学)、橋本努 (経済思想・哲学)、川瀬貴之 (法哲学) の計4名による共同研究として実施した。

野崎亜紀子 (研究代表) ; 研究の取りまとめ。研究会開催のアレンジメント等。集合的決定に係る諸問題における制度政策形成過程および状況。

嶋津格 (分担研究) ; 法哲学と政治思想・哲学境界領域における議論状況。

橋本努 (分担研究) ; 法哲学と経済思想・哲学境界領域における議論状況。

川瀬貴之 (分担研究) ; グローバル・ジャスティス論における議論状況。

(2) 研究の方法と全体の流れ

本研究は、法哲学内部の先行研究 (井上達夫編『立法学のフロンティア1 立法学の哲学的再編』(2014)) の検討に加えて、集合的意思決定に関わる問題に取り組む近接学問領域における先行研究を踏まえて、正義論としての集合的意思決定論の位置づけを念頭に、各研究者が得意とする領域における検討を進め、研究発表を行う中で理論構築に向けた検討を行った。

上記 - の領域問題について、研究目的に示した重要先行研究の他、上記 法哲学・政治学

境界領域ではJoseph M. Bessette, *Deliberative Democracy: The Majority Principle in Republican Government* (1980) を端緒とする一連の民主主義論の一環としての熟議民主主義論 *deliberative democracy* の議論、山崎望・山本圭編『ポスト代表制の政治学—デモクラシーの危機に抗して—』(2015)、ブルース・アッカーマン等一連の熟議論を踏まえた思考/検討を行った。

同 法哲学・経済学境界領域では特に現代の(集合的)意思決定論の新たな展開が見出せる「新厚生主義Neo-Welfarism」の流れに着目し、サーベイを踏まえた上での理論構想の提示を行った。

同 本研究で取り組む具体的な要解決課題は、国家を越えた問題群でもある。井上達夫『世界正義論』(2012)ほかの最新のグローバル・ジャスティス論を踏まえ、且つ同 では現に集合的意思決定によって制度設計が図られている応用倫理学領域の制度設計過程及びその状況の精査を行った。

上記、各研究者が担う領域と視角をもって、研究会等の意見交換を実施し、さらには共同研究プロジェクトとして、国際学会で意見交換を行い、広く内外における議論を踏まえた上で更に、研究会等で意見交換を行うという方法を探った。

4. 研究成果

本研究成果について以下、年度を追って論じる。

(1)2017年度

共同研究者相互の本研究における方針の共有を図ること及び各担当領域における先行文献等の資料収集と検討を行うことを予定していた。本共同研究遂行のために「正義論としての集合的意思決定論研究会」を立ち上げ、各分担研究者を主たる構成員とし、同研究の先行研究および周縁の関連領域研究者との連携関係を構築する基盤とした。

本年は研究会を1回開催し(2017年7月8日於ノ北海道大学)において、1. 本研究会の方針と課題を共有する場とし、2. 報告)野崎亜紀子「生命医学研究におけるプロフェッショナルリズム・ガバナンス・法」を元に、集合的意思決定を行う際の整備されるべき環境条件としてのプロフェッショナルリズムの醸成とその規律のあり方をめぐって検討を行った。

第1回研究会での研究方針の確認の後、各自担当領域における先行研究等の動向などの活動を行った。野崎は、集合的意思決定を行う際の環境条件としてのプロフェッショナルリズムが有する特権性について検討し(日本法哲学会における大会統一テーマ内報告に、その一部が含まれる)、川瀬は、自動運転車の規律を巡るドイツ、ビジネス・エシックスの議論に接し(千葉大学法学論集内にその一部が含まれる)、橋本は、経済理論・思想をふり返る中で検討を進め(本年度公表の論文等の中にその一部が含まれる)、嶋津は、法哲学者ジョエル・ファインバーグの議論を詳細に再検討する等の取り組みを行った。

(2)2018年度

研究代表者及び分担研究者全員が出席して4回の研究会を開催した他、研究代表者(野崎)は、本研究テーマの一環としての個人と公権力とはことなる共同体であるところの専門家集団を背景とする研究者の自律的意思決定が内包する集団的背景の意義と機能(リベラリズム法学を補完する役割)をめぐって、日本法哲学会2017年度年次大会統一テーマ「生命医学研究と法」シンポジウムで検討を行った(『法哲学年報2017』)。さらに本研究に参与する全研究者は、本研究の基盤となる発想としての「自由と協働」をテーマとして論文を執筆し、本研究の基本的考え方を提示した(『法の理論37』)。また、川瀬と野崎は、国際学会においてもそれぞれ、自律的個人としての活動と規律を支える集団的背景をテーマに含む報告を行った(The 1st IVR Japan International Conference 2018)。

このほか、本研究は国内外における発信および検討を行うことを研究計画内に予定していたが、2019年に開催されるIVR(法哲学社会哲学国際学会連合)世界大会でのSpecial Workshopを本研究の分担研究者以外のメンバーとともに企画し採択された(Collective Decision Making in a Theory of Justice, Convener, Prof. NOZAKI, Akiko)。

(3)2019年度

本研究者全員による研究進捗の共有及び国内外の研究者との議論を行うために、Internationalen Vereinigung für Rechts- und Sozialphilosophie@Universität@Luzernに参加し、本研究代表者である野崎を開催責任者として、Special Workshop 78 Collective Decision Making in a Theory of Justiceを開催し、本研究全員に加えて、山田八千子氏(中央大学教授)が参加・報告の上、他参加者と共に議論を行った。

集合的意思決定を主なキーワードとして検討を進めてきた本研究の成果の途中経過として、野崎はリベラリズムにおける公私のつながりという観点から Relationship between reproduction and liberal society Reasons for Regulating Freedom- Reconsideration- Welcoming a Taboo-less Society, 川瀬はグローバルジャスティスの観点から How can a group take responsibility?, 橋本は経済哲学の観点から A Theory of Spontaneous Well-being, 嶋津は法・社会哲学の観点から Collective Freedom: From an Individualist Point of View, ま

た山田氏は私法の観点から Private Law and Collective Decision と題する報告を各々に行い、議論の共有に加えて他の参加者との間で議論を行った。

(4)2020 年度

最終年度として、これまでの研究を統合的に検討し、研究を実施した。現下のパンデミック状況のため、予定していた対面での研究会や共同研究外の研究者との研究会等における意見交換等は実施できず、また国際会議でのworkshopが叶わなかったが、共同研究者各自での検討を進め、最終的には計3回の研究会をオンラインで実施した。

第1回研究会は、野崎亜紀子「専門家とリベラリズム」報告を行った。専門家という専門知の共有を前提とする集団性を背景とする専門家と、リベラリズムが基盤とする個人の尊重とは、緊張関係にあるものの、両者には相互補完性があること、さらには近代法を基軸とする社会を支えるリベラリズムの健全な維持には、醸成された専門家集団による情報提供（研究）環境の整備が必要であることを論じた。

第2回研究会は、嶋津格「多様性」とNationの分裂：米国における自由と平等の行方」報告を行った。米国保守派の議論を中心とした現代の議論現状及びその理論的背景の検討が行われた。現在党派的な様相を呈すると評される米国保守派の議論動向を共有することで、集合的意識形成と社会構造との関係を正義を基底として検討する機会を得ることとなった。

第3回研究会は、川瀬貴之「『リベラル・ナショナリズムの理論』で言いたかったこと」報告を行った。リベラリズム擁護への根拠要請に比して、ナショナリズム擁護に対する理由が過剰に要請されることの意味・意義を中心とした報告を行った。リベラリズムとナショナリズムとの対立は必然ではなく、相互に道具的補完性を有する点等、検討する機会となった。

これら3回の研究会及びその前提となる各研究の遂行により、本研究が目的とする、既存のリベラリズム理論に新たな視角を提供し、以て既存の規範理論の改良という純理論的な意義に止まらない方向性の示唆を得た。

(5)まとめ

本研究の成果は、2019年度に開催した国際学会ワークショップ Collective Decision Making in a Theory of Justice での議論を踏まえた上で、2020年度に各研究者が公表した著書、論文に結実している。特に著書である以下2書について、本研究の成果として著しておく。

川瀬が著した『リベラル・ナショナリズムの理論』では、個人を基盤とするリベラリズムと、国家という枠組みを前提とする集団性との間の相互補完性の解明が試みられた。川瀬はリベラリズムを主とし、ナショナリズムをその手段と位置づけ、リベラルな体制の維持には統合された国民共同体が必要である一方、その国民国家体制のあり得べきあり方にはリベラリズムが資する、として両者の相補性を主張する。この主張の基盤には、安定的な社会—そしてそれは多様な個人による共存の持続的な維持を要する社会—の維持に必要な柔軟さを最も良く内包するイデオロギイとしてのリベラリズムと、それによって維持される集団としての国民国家を企図するナショナリズムが構想されている。

橋本が著した『自由原理 来たるべき福祉国家の理念』では、各人の善き生 well-being の実現を目指す主体として福祉国家を位置づけ、この福祉国家を構成する原理としての自由原理を提示した。福祉国家という集団存在を支える自由の原理は、すなわちその集団を構成する個々の人間についての人間論でもある。

他、論文として、野崎は「専門家とリベラリズム」を発表した。ここでは自由な社会を構想するリベラリズムにおいて、その社会形成基盤となる知の流通環境を支えるプロフェッショナルリズム集団、およびそれを背景とする専門知という要素が持つ役割およびその不可欠性を論じた。

本研究成果は、更に本研究を発展的に継承の上、更なる成果として書籍刊行という形での公表を計画している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 38
2. 論文標題 関係のプライバシーを問う理由－《個人の尊重》から考える－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法の理論	6. 最初と最後の頁 221-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 1
2. 論文標題 医事法の基本原理－法哲学の視角から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医事法雑誌	6. 最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 26
2. 論文標題 生の両端領域から考える－代理出産 なぜそれは規制され得るのか（再）－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京葉論集	6. 最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 520
2. 論文標題 グローバルな社会と個人の自由	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 TASC monthly	6. 最初と最後の頁 6-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋津格	4. 巻 91(5)
2. 論文標題 実定法学と啓蒙	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋津格	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 無知の知をめぐる考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 批判的合理主義研究	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋津格	4. 巻 38
2. 論文標題 中山コメントへのリプライ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法の理論	6. 最初と最後の頁 197-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬貴之	4. 巻 38
2. 論文標題 リスク類型化の方法と多元主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法の理論	6. 最初と最後の頁 211-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWASE, Takayuki	4. 巻 161
2. 論文標題 A Liberal Justification of Nationalism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Rule of Law and Democracy	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HASHIMOTO, Tsutomu	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 A Theory of Real Freedom: Toward a Growth-oriented Liberalism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Review of Economic Philosophy (Journal Revue de philosophie économique)	6. 最初と最後の頁 63-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3917/rpec.201.0063	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 38
2. 論文標題 リスク認識とイデオロギー 新たな理論と調査結果の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法の理論	6. 最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 1142
2. 論文標題 幸福の経済原理---自生的な善き生(ウェルビーイング)の理論(下)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 103-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋津格	4. 巻 37
2. 論文標題 リスクと「安全・安心」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法の理論(近刊)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬貴之	4. 巻 33-1
2. 論文標題 臨床研究におけるリスク・ベネフィット評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学法学論集	6. 最初と最後の頁 163-202
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬貴之	4. 巻 37
2. 論文標題 リスクとリスク対処の類型~臨床研究とグローバルジャスティス~	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法の理論(近刊)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 2月号
2. 論文標題 幸福の経済原理---自生的な善き生(ウェルビーイング)の理論(中)---	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 88-102
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 12月号
2. 論文標題 幸福の経済原理---自生的な善き生(ウェルビーイング)の理論(上)---	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 6-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsutomu HASHIMOTO	4. 巻 60-1
2. 論文標題 How a Fat Slave Can Make His Soul Noble: Takenori Inoki on Liberty	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 164-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsutomu HASHIMOTO, Kazumasa ODA, Yuan QI	4. 巻 68-1
2. 論文標題 On Well-being, Sustainability and Wealth Indices beyond GDP : A guide using cross-country comparisons of Japan, China, South Korea	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Economic Studies	6. 最初と最後の頁 35-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 生命医学研究におけるプロフェッショナリズム・ガバナンス・法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法哲学年報2017 生命医学研究と法	6. 最初と最後の頁 60-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 50
2. 論文標題 意味ある仕事の分配論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済社会学会年報	6. 最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 37
2. 論文標題 リスク認識とイデオロギー 新たな理論と調査結果の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法の理論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 53
2. 論文標題 個人の尊重 と 他者の承認 - 新型出生前検査から考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 同志社アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 191-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野崎亜紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 「日本法哲学会2016ワークショップ概要 リスク社会における自由と協働の秩序」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本法哲学会編『法哲学会年報2016 ケアの法 ケアからの法』	6. 最初と最後の頁 171-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬貴之・中井良太	4. 巻 32巻3・4号
2. 論文標題 講演翻訳「クリストフ・リュトゲ：自動運転車のための倫理：ドイツの事例から」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学法学会、法学論集	6. 最初と最後の頁 28-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HASHIMOTO, Tsutomu	4. 巻 59-2
2. 論文標題 A Fundamental Economic Thought Problem on Peace and War since the Cold War: A Critical Appraisal of E. Schumacher, J. Galbraith, and K. Boulding	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 5月9日号
2. 論文標題 ミニマリズムで脱・資本主義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 497
2. 論文標題 自由の第三パラドックス	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 TACS MONTHLY	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 NOZAKI, Akiko
2. 発表標題 Relationship between reproduction and liberal society Reasons for Regulating Freedom- Reconsideration- Welcoming a Taboo-less Society
3. 学会等名 Special Workshop no.78: Collective Decision Making in a Theory of Justice in IVR World Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMAZU, Itaru
2. 発表標題 Collective Freedom: From an Individualist Point of View
3. 学会等名 Special Workshop no.78: Collective Decision Making in a Theory of Justice in IVR World Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWASE, Takayuki
2. 発表標題 How can a group take responsibility?
3. 学会等名 Special Workshop no.78: Collective Decision Making in a Theory of Justice in IVR World Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川瀬貴之
2. 発表標題 権利があると、社会はどうか（ワークショップ『ジョエル・ファインバーグの法哲学を描き出す - 自由と権利の観点から』）
3. 学会等名 日本法哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HASHIMOTO, Tsutomu
2. 発表標題 A Theory of Spontaneous Well-being
3. 学会等名 Special Workshop no.78: Collective Decision Making in a Theory of Justice in IVR World Congress 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takayuki KAWASE
2. 発表標題 Liberal Justification of Nationalism
3. 学会等名 The 1st IVR-Japan International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki KAWASE
2. 発表標題 A Theory of Risk Management, From a Japanese Perspective
3. 学会等名 Digitization and Business Ethics(study group) in Technische Universitat Munchen
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akiko NOZAKI
2. 発表標題 A Right to Have Children: Relationship between Reproduction and Liberal Society
3. 学会等名 The 1st IVR-Japan International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akiko NOZAKI
2. 発表標題 Professionalism, Governance and Law in Biomedical Science in Liberal Society
3. 学会等名 Study group in Peter Loscher-Stiftungslehrstuhl für Wirtschaftsethik und Global Governance TUM School of Governance Technische Universität München
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野崎亜紀子
2. 発表標題 ケアの倫理とリベラリズム～リプロダクション（生殖）をめぐる視角から～
3. 学会等名 大阪府立大学女性学研究センター2018年度第22期女性学講演会「ケアの倫理とリベラリズム-依存、生殖、家族-」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsutomu Hashimoto, Yusuke Kanazawa and Kyoko Tominaga
2. 発表標題 "How can we articulate Japanese Rising Middle Class," ("A New Liberal Class in Japan: Based on Latent Class Analysis," a part of the presentation)
3. 学会等名 East Asian Sociological Association (EASA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野崎亜紀子
2. 発表標題 「生命医学研究におけるプロフェッショナリズム・ガバナンス・法」
3. 学会等名 日本法哲学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 橋本努	4. 発行年 2019年
2. 出版社 講談社メチエ	5. 総ページ数 317
3. 書名 解読ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』	

1. 著者名 Christoph Strosetzki eds	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 198
3. 書名 The Honorable Merchant - Between Modesty and Risk-Taking (Itaru SHIMAZU, The Most Successful and Moralistic Merchant at the Dawn of Japanese Capitalism; Shibusawa and His Confucianism, 191-198)	

1. 著者名 嶋津格、飯田巨之監訳、川瀬貴之、野崎亜紀子、他訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 xvi+523
3. 書名 倫理学と法学の架橋 ファインバーグ論文選	

1. 著者名 松元雅和・井上彰編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 264
3. 書名 人口問題の正義論（第5章 野崎執筆「子どもを持つ権利と生殖とリベラルな社会の接続を考えるために」）	

1. 著者名 Yukihiro Ikeda, Annalisa Rosselli eds.,	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 266
3. 書名 War in the History of Economic Thought: Economists and the Question of War (HASHIMOTO, Tsutomu, chap. 9 Takata Yasuma 's theory on power and his political stance on race)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 努 (HASHIMOTO Tsutomu) (40281779)	北海道大学・経済学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	嶋津 格 (SHIMAZU Itaru) (60170932)	獨協大学・法学部・特任教授 (32406)	
研究分担者	川瀬 貴之 (KAWASE Takayuki) (90612193)	千葉大学・大学院社会科学研究院・准教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------